

# 日本婦道記

笄堀

山本周五郎

青空文庫



さかまき鞆負之助ゆきえのすけは息をはずませていた、顔には血のけがなかつた、おそらくは櫛くしをいれるいとまもなかつたのであろう、乱れかかる鬢びんの白毛は燭しょく台だいの光をうけて、銀色にきらきらとふるえていた。——ああ鞆負はうろたえている。真名女まなじよはそう思った。そしてそう思ったときに、自分のやくめがどんなに重大であるかということ悟った。

「この事を誰が知っていますか」

「まだわたくしだけでござります」

「使の者はどうしました」

「わたくしの住居にとめ置いてござります」

真名女はちよつと眼をつむつた。——おちつかなくてはいけない、決してせいてはならない、いま自分が云うどんなひと言も忍おしじょう城の運命にかかわらずにはいないのだ。つむつた眼をしずかにみひらき、冷やかとも思える声で真名女は云つた。

「ではこなたはさがつて、その使者を誰にも会わせぬようにはからつて下さい、そして子の刻ねこく（午後十二時）までにとしより旗頭、それからものがしら全部を翼たつみやぐら矢倉へ集めてもらいます」

「すればやはり館林へ御合体でござりますか、それとも……」

「あとで、それはあとで云います」

きびしいこわねだった。

「みなが集つて、みなの見解をも聴いたうえで云います、それま  
では決して表だたぬよう、ほかの者たちに気づかれぬようにして  
下さい」

鞆負之助はさがつていった。

真名女はひとりになつた、両手を膝ひざに置いたままじつと眼をつ  
むつた。自分の心がどのような状態にあるか、まずそれをみきわ  
める必要がある。もしや動どうてん顛してはいはしまいか、平常から覚悟  
はきめていたと信ずる、その覚悟にゆるぎはないかどうか、じつ  
と息をつめ、縫物の針のあとを数えるような冷やかな丹念さでお  
のれの心のありどころを追求した。……たしかに、心は動揺して

いた、つねにはあれほどはつきり自分を支えていた心の中心が、いまはぐらぐらとゆるぎだし、なんにでもよい、力かぎりすが継りついでゆけるものを求めて足ずりをしているようだった。

——そうだ、この弱いうろたえた気持はたしかに自分のなかにある、これをごまかしてはいけない、自分はまずよくよくこの惑い乱れた心をつきとめるのだ。われとわがからだの腑分ふわけをするように、真名女は自分の臆した心をどこまでも追いつめていった。

豊臣秀吉が関白太政大臣の権勢と威力をもつて、北条氏討伐のいくさをおこしたのは、そのまえの年（天正十七年）十月のことであった。天下の諸雄はほとんどその旗下にはせ参じ、明けて今年ねんの三月には小田原城をまったく包圍してしまい、さらに石田三

成、大谷吉継、長束正家らをして上野、武蔵、下総の諸国にある北条氏の属城を攻めおとすべく軍を進めさせた。……酒巻鞞負之助のもとへ来た使者というのは館林城からのもので、すなわち石田三成が三万の大軍をもつてくに境へ迫っている、すぐにこちらへ合体せよという知らせであった。北条氏はいくさが始まるとすぐ、関東諸国にある属城の主たちを小田原へ召集した、これは本城のまもりを固めると同時に、属下の離反をふせぐ策だったのである。城主たちはおのおのその兵の大半をつれて小田原城へたてこもった、したがって留守城はどこも防備がてうすだった、兵も武器もとぼしかった、それでみずからたのみがたしとみた足利、飯野、板倉、北大島、前岡、西島などの諸城の人々は、北条氏規

の居城だった館林の城へ合体したのである。

おし 忍の城主成田 しもうさのかみ 下総守 氏長も子息氏範と共に精兵五百余騎を

したがえて去り、城に残った兵はわずかに三百そこそこだった、あとは老人と幼弱者と婦人たちだけで、もちろん武器も足りなかった。真名女は良人おつと氏長の留守を預るとき、この事実をよく承知していた、そしてもしも小田原が落城し、関西の軍勢が押しよせて来るようになったら、城に火をかけていさぎよく自害しようと思いをきめていた。——成田氏長の妻として、太田三楽齋のむすめとして、世に恥じぬ死にかたをするのが自分のつとめである。そう覚悟していたのだ。しかし事情はまったく違ってしまった、小田原城が重囲のうちにあつてなお頑強にたたかっているとき、は

やくも関西軍の一部が攻めよせて来たという、城に火をはなつて死のうという覚悟は、小田原城が落ち、良人もわが子も討死をしたあとのことである、まだ本城はたたかっているし、良人もわが子もいくさのなかにいるのだ、自分の死ぬときはまだ来ていないのである、まかせて去った良人が生きているうちは、預った城をまもりとおすのが妻のつとめなのだ。

## 二

しかしはたしてそれが可能であろうか、三百にたらぬ兵と、充分でない武器とで、三万の敵軍に対抗することができらるであろう

か。

真名女は身ゆるぎもせず、坐っていた、あたりの空気が重みをもっていて、それが四方から圧し縮まってくるような息ぐるしさだった、堪えかねて喘あえいだ、誰か呼んで身を支えてもらいたいというはげしい衝動を感じた、それはまさに堪えきれぬはげしさだったが、真名女は齒をくいしばって自分のそのよろめく心を見まもった。その衝動に負けてはならない、体を躲かわしてもならない、——さあ弱音をあげるがよい。とかの女は自分に云った、——女はこころ弱いものだという、どれほど弱いか、どれほど臆病であるかすつかり吐きだしてしまうがよい、みせかけの強がりや、つくりものの勇氣などではとてもこの難関に当ることはできないの

だ、もつともつと、あるだけの弱さ、あるだけの脆もろさをだしきつてしまえ、骨の髄まですはだかになるのだ。

みずから自分を突きめし、鞭むちうつような気持だった、それはたたかいであった、靱負之助がさがってから半はんとき刻あまりの時間ではあつたけれど、その短い時間のうちに真名女のたたかいはあつたのだ。どこかでひそやかな、さむぎむとしたものの音がしていた、雨のようでもあり遠い潮鳴りのようでもある、かなりまえから耳についていたのが、しだいにはつきりしてきたと思うと、やがてそれは館の庭にある竹たかむら叢に風のわたる音だということがわかった、氏長が大和やまとのくくにから、はるばるとりよせた篋へらだけ竹たかむらというもので、植えてから十年ほどにもなる、ひろくて長い優美な葉

をつけ、雨にも風にもよきふぜいを添えるし、また矢を作るのに適していたから、殖えるにしたがつて城中のそこかしこに植え移してあった。その竹叢にいま夜風がわたっているのだ、そしてそのさやさやと鳴るかすかな葉ずれの音をそれと聞きとめ、あああの竹だったかと思ひ当つたとき、真名女はふと、いつかしら自分の胸が軽くなつているのに気づいた。それは心がおちつき場をもつたしるしだった、弱さは弱さなりに底がある、その底をつきとめ、その底をたしかに踏みしめたとき、竹叢にわたる風の音を聞きわけゆるとりができたのである。かの女はやがてしずかに眼をみひらいた、あれほどよろめきたゆたつていた心が、とにもかくにもおちついていた。自分には、自分にできるかぎりのことしか

できない、十のもので百のたたかいをするちからは自分にはない、それはたしかだ、けれども十のものを十だけにたたかいきることはできそうだ。そういう気がしはじめた、軍の法いくさもよくは知らないし、奇略とか妙策とかいうものもない、自分はごくあたりまえな女である、平凡なひとりの妻にすぎない、ただその平凡さをできるかぎり押しとおし、つらぬきとおすことよりほかになんのもりえもない、そしてそのかぎりなら自分にもできるはずだ。

あらいざらい弱さ脆さを吐きだしてしまったあとの、おちつき場を得た心の底からすこしずつちからがわきあがってきた。それはもうごまかしではなかった、作りものでもなかった、真名女はそれでもなおよくそれをたしかめてから、はじめてふところ紙を

とりだして両手をぬぐった、両の掌にはじつとりと膏あぶらあせ汗あせがに  
じみ出ていたのである、それからしずかに座を立つておのれの居  
間へはいっていった。そこには二人の侍女が燭しよくをまもっていたが、  
それをさがらせて、室の上座にかざってある鎧よろいの前へいつて坐つ  
た。それは良人が出陣をするときに、「いざという場合にはこれ  
を氏長だと思つて死ね」

そう云いのこしていった品である、真名女はしっかりとその鎧  
をみまもつた。

「申上げます」襖ふすまのむこうで侍女の声がした、「酒巻殿おあがり  
にござります、みなみな仰せつけの場所に伺候つかまつりました  
との言上にござります」

「やがて出ると申せ」

侍女はしづかに去った。真名女はなおしばらくのあいだじつと坐っていたが、やがて娘の甲斐姫かいひめに来るようにと伝えさせた。姫はそのとき十四歳だった、母に似たきわめてうるわしいみめかたちをもち、心もおとなびていたしからだつきもすぐれて大きかった。

「申しきかすことがあります、こちらへおすすみなさい」

真名女はそう云つて向き直った、甲斐姫はしづかに母の前へすすみ寄った。

姫に良人の兜かぶとを捧ささげさせて、真名女が巽たつみ矢倉やぐらへわたったのは子の刻をかなり過ぎてからのことだった。そこには留守年寄の鞆負之助をはじめ、成田康長、正木丹波、舟橋内匠たくみ、新田常陸介ひたちのすけ、成田次家などの旗がしら以下、番がしら格の者たち三十余人が集っていた。かれらの多くは老人であり、実戦の経験もほとんどなく、永禄三年に上杉謙信と戦ったときも、壮年で従軍したのは、そのなかで鞆負之助ひとりといってよかつた。もちろんこの期ごにおよんで未練な考えをおこすほど卑怯ひきょうな者はないであろう、しかし事態の重大さがかれらを動揺させていることはたしかだった、真名女はそれをはつきりと認めながら、「館林からの使者のおも

むきは、鞆負之助からすでにきいたことと思います」としずかに云った。

「使者の口上には、この城をひきはらって館林へ合体するようにとあります、みなみなはどう思われますか、ありようの意見を申し述べてもらいます」

しばらくは息苦しい沈黙が広間を占めていた、それで鞆負之助が答をうながすと、新田常陸介が同意の者の意見を代表して、館林城へ合体するのが良策であると答えた。

「忍<sup>おしじょう</sup>城はまもりもてうすく、兵も武器もとるにたらぬ数ではあり、とうてい大軍をひきうけて戦うことはできません、それにひきかえ館林の城は防備も堅く、上<sup>こうずけ</sup>野八ヶ城の人数が合体して

おりますから、これと力をあわせれば存分に合戦ができると存じます」

「わかりました」

真名女はうなずいて人々をみまわした。

「いま常陸介の申した意見をもつともと思う者は前へすすむがよい」

かれらは互いに眼をみかわしたが、やがてほぼ半数の者が席をすすめた。

「あとの者はべつに意見がありますか」

「われらは」と舟橋内匠が云つた、「いかようともおかた様のおぼしめしどおりにつかまつる所存でござります」

「それは意見ではあるまい」常陸介がきつと向き直った、「おかた様おぼしめしどおりとは、われらも申すことだ、いくさ評定であるかぎり、殿お留守をあずかる責任をも考えあわせ、しかとした所存を申上ぐべきではないか」

「これがわれらのしかとした所存なのだ」

ふたりはそこで激しく議論をたたかわした。さいぜんからおなじ問題がやりとりされてきたものとみえて、ほかの人々も二派にわかれて、こわだかに云いつのつた。しかしやがて、だまって聴いている真名女に気づいて、はてしのない議論をやめた。しずかになった広間の四壁に、燭の光が人々の影をおどろおどろしくうつしだしている。

「おかた様にはいかがおぼしめしまするか」

酒卷鞆負之助がはじめて口をひらいた、真名女はうちかえすよ  
うに云った。

「わらわはこの城をまもります」

無造作な、なにげない言葉だった、常陸介がずっと顔をあげた。

「軍議ゆえぶしつけにおうかがい申します、城のふせぎは備わら  
ず、武器は足らず、しかも僅かに三百の兵をもつて、おかた様に  
は、まことに三万の軍勢とおたたかいあそばすお覚悟でござりま  
すか」

「そうです」

「それにはなにかおぼしめす軍略でもござりますか、城の内外に

ある老幼婦女をどうあそばしまするか」

「常陸介はわらわをなんとみるぞ」

「……………」

「わらわを女とはみぬか、ここにいる姫を少女とはみぬか」

常陸介は言葉につまった。

「おんなの口からはおこにもきこえようが、いかに堅固な城に拠ればとてたたかに勝つとはきまるまい、余るほどの武器、精鋭すぐった大軍をもつても、負けいくさになるためしは数々ある。

城にたよる者は城によつて亡びる、武器にたよる者は武器によつてやぶれる、大切なのは城でも武器でもなく、それをもちいうごかす人の心にあるのではないか、十万百万の兵も烏合うごうの衆では足

なみも揃そろうまい、これに對して一騎当千と申す言葉がある、これはその人の強さではなく、たたかう心のあらわれを申すものだと思う、その心のあらわれが、軍いくさの運をきめるのではないか」

すこしも氣負つた調子はなかつた、平常どおりの優雅な夫人のこわねだつた。

「わらわは兵も武器も足らぬとは思ひませぬ、弾丸ひとつ、矢ひとつ筋、その一つ一つにむだがなければ武庫にあるだけでも余るくらいです。兵はなるほど三百そこそこでしょう、けれどたたかいは兵だけがするものではない、忍の領土に生きる者はみな兵となつてたたかう筈です、老人も、幼児も、婦女も、……すくなくともわらわと姫とはたたかいます」

そう云つて真名女はしづかにうわぎをぬいだ、甲斐姫もぬいだ、ふたりとも下には鎧の腹巻をつけていた。

#### 四

評定はその一瞬にきまつた、館林へ合体しようと言つた常陸介とその同意の人々も、むろん忍城のまもりにつく決意をかためた、真名女はその評定がもはやゆるぎのないものだともみきわめると、良人の兜をとつてしづかにかぶり、

「ではあらためて、唯今からわらわが忍城のあるじになります、

このかっちゆう甲冑は下総守氏長さまのおきせかえでした、この甲冑を

つけて命ずることは、下総守の下知げちと思つてもらいます」

そう云いながら立ちあがった真名女のすがたは、甲冑もよく似合つて、ひじょうに凜乎りんことしたものだった、人々は歎賞のこえをあげながらひとしく平伏した。……真名女はそれを見おろしながら——これでたたかいの第二にも勝つた。そう思い、兜の眉庇まびさしのおかげでほっと太息をついた。はじめにおのれの弱い心に勝ち、ここでは城兵の戦う心をかためた。真名女はこうして、敵とたたかうまえに、まず味方の備えをたたかい取つたのである。

あくる日の朝、酒巻、舟橋、成田次家、新田、成田康長の五人が本丸へまねかれた。真名女は甲冑をつけて上座につき、五人のつくべき役目を申しわたした、すなわち酒巻鞆負之助は総奉行に

軍監を兼ねる、舟橋内匠は武庫奉行、新田常陸介は槍、弓、鉄砲奉行、成田次家と康長は城壘奉行として、城の門木戸をかためる、そしてその各役目の下におくべき番がしら手代まできちんときめた。かくてその日のうちに、城下町はいうまでもなく、領内のはしはしまで城主の名をもつて布令書がまわされた。それには関西の軍勢三万余騎が攻めて来ること、城主はじめ留守の将士は城をまもつてたたかう覚悟のこと、領内の民たちのうち忍城にたてこもるべき心ある者は老幼婦女にかかわらず城へ入るべきこと、その心なき者は仔細しさいなくたちのくべきこと、以上四方条をわかりよく書いたものであった。その一方では、糧食から矢竹、鉛（弾丸をつくるため）、領内にある刀、槍のたぐいを買上げさせた。つ

ぎの日あたりから領民が集りだした。城主の恩にむくゆるためか、領土をまもろうとする心からか、老人が女が子供たちが、みんなかたい決意の色をみせて集つて来た、それは五日のあいだ続いた。そしてもう来る者はないときまつたとき、真名女はかれらと対面をした。領民たちは本丸の馬場にあつまっていた、真名女は姫に兜を持たせて城壁の上へあらわれた、五人の旗がしらがこじゆう扈従していたが、萌黄村もえぎむら濃の鎧に太刀を佩はいた真名女のすがたは五人の武者をはるかにぬいてみごとだった。領民たちはその壮美なすがたに心をうたれ、互いに感動のこえをあげながら、あたらしくたたかいの決意を誓いあつた。

すぐに戦備がはじめられた。弾丸を鑄る者、矢を作る者、防塁

を築く者、糧食を運ぶ者、木戸を結う者など、城の内外はめざましいほどの活気に満ちてきた。また城中の武士の婦人たちだけで城壁の外廓に壕ほりを掘った、これはひじょうに大掛りなものだったが、しまいまで婦人たちだけでやりとおした。……この壕を掘りはじめてから間もなくのことである。靱負之助がみまわっている、婦人たちのあるひと組が仕事の手をやすめて、なにかひそひそ囁ささやきあっているのをみとめた。近寄つてなにをしているかとたずねると、ひとりが手に持っていた筭こうがいをさしだして、「このような品が壕のなかに落ちていましたので」とふしんそうに云った。

「そのもとたちの持場だ、筭が落ちていふしぎはあるまい」

「なみなみの品なればふしんはござりませぬが、これはわたくし

どもの用うるものではござりませぬ」

「そればかりではなく」とそばにいたひとりが云った。

「わたくしそのお筭には見おぼえがござります、わたくしは数年まえまで奥へあがっております、そのおりたしかに見おぼえております、それはおかた様が日常お用いなされる品でござりました」

「これが、この筭が、おかた様の……」

鞆負之助は婦人の手から筭をうけ取った、或ることがふとかれの頭にひらめいた。

「いずれにもせよ」とかれは筭を懐紙に包みながら云った、「かような品の詮議せんぎをするいとまはない、領民たちにおくれをとらぬ

よう、一日も早く壕を掘りあげなければならぬ、しつかりたのむぞ」

やはりおかた様だ、おかた様がおしのびで、自分たちと一緒に壕を掘っていらつしやつたのだ。婦人たちがそう囁き合うこえを聞きながら、靱負之助はそのあしで本丸へあがつた。広書院へ伺候すると、いつものとおり甲冑をつけた真名女が、ちゃんと上段の床しょうぎ几にかけていた。靱負之助は内密の言上だからといって、侍女たちの遠慮をねがった、真名女は手をあげて侍女たちをさがらせた。

「今日かような品が、壕づくりの場所よりみいだされました」

靱負之助は笄をさしだしながら、上段のきわまで膝をすすめた。

「かれらのなかに、かつておそば近く仕えた者がおり、おかたさま御用の品と申しております、その者のおぼえ違いでござりましようや、それともおかたさま御用のお品にござりましようや」

「……………」

「もし御用の品なれば、家臣どもと苦勞をおわかちあそばすおぼしめしでござりましようが、それはいささかお考え違いと申さねばなりません、おかた様は忍城のおんあるじ、さようなかるがるしいおふるまいは」

そこまで云いかけて、韃負之助はあつと眼をみはった、兜の眉庇のかげにみえたのは真名女ではなかつた、真名女によく似たうるわしい面ざしではあるがそれは甲斐姫であつた。姫が母に代つ

て甲冑をつけていたのであった、

「これは……」

靱負之助はつぐべき言葉を知らなかった。そしてかれには今、家臣の妻たちといっしよに土まみれになって、壕を掘っている夫人の姿がみえるように思えた。

## 五

石田治部少輔三成が三万の軍をもつて上野のくにへ攻めいつたのは天正十八年五月であつた。かれは佐竹、宇都宮、結城、多賀谷の諸将を指揮し、二十七日早朝から館林を攻撃せしめた。館林

には留守兵をはじめ、上野のくに八ヶ城の兵およそ六千余騎がたてこもり、力をあわせて防戦したが、もとより寄り集りの兵のことで決戦の意気もなく、わずか三日のたたかひにあえなくやぶれ、おなじ三十日にはついに降参のうえ開城してしまった。

勝ちいくさに勢いをえた石田軍は、ただちに忍の領内へ侵入し、六月一日、城を包囲してひと揉みもとばかり攻めたてた。

城はびくともしなかつた。はじめから忍城の防備がどれほどのものかよくわかつていた、館林でさえわずか三日で陥ちたのである、まして忍などは半日もかかれば片付くにちがいない、将も兵もそう思っていた。まるでなめてかかったその攻撃のばなは、しかし予想もせぬはげしい防戦をもつて叩かれ、よせてはひじよ

うな損害をこうむつて敗退した。——こんな筈はない。かれらには自分たちの敗けた理由がわからなかつた、また城兵のまもりが堅いのだとは考えられなかつた。——あなどりすぎたのだ。——

こんどこそはひと押しだ。攻撃はつづけておこなわれた。二ど、三ど、しかし城はやはりびくともしなかつた。泥でつくねたくらいに思つていたのが、じつは鉄石の壁だつた、こんどこそはと必死の攻撃をしかけるたびに、寄手は少しずつ忍城がどのようなまもりであるかをおしえられた。そして、あまりに予想とかけはなれた事実をみて茫然とした。城兵の数は知れたものである、武器も多くはない筈だ。それでいて実際にはおどろくべき防戦ぶりをみせた。城には四つの門と五つの木戸があつた、そのうちどのひ

とつを攻めても兵が充分にいて防ぎたたかうのである、よせてを  
ま近へひきつけておいていつせいに射だす矢が、弾丸が、ひとつ  
の無駄もなく生き物のようによせての兵をうち倒した。はげしい  
斉射につづいて斬って出る城兵のすさまじいたたかいぶりは悪鬼  
とも羅刹らせつとも云いようがない、それがどの攻め口についてもおな  
じだった。——城兵は三百あまりということだったが、事實は二  
千より少くはないぞ、それも精鋭すぐった兵に違いない。そうい  
う評判がよせての陣にひろまった。——これは迂濶うかつには攻められ  
ぬ。

主将三成もこの評判をきいた、かれも忍城の堅固さにおどろい  
ていたので、ある日その本陣を出て丸墓山の丘の上に立った。忍

は平城である、北に刀根川の流れがあり、南には荒川が蛇行して  
いる、城はそのほぼ中間にあつて地盤は低く、その周囲には水田  
と沼沢とがうちわたしてみえる。そしていま三成の立っている丸  
墓山の中心に、小高い堤が北と西とへのびていた、これはふたつ  
の川がしばしば氾濫する<sup>はんらん</sup>ので、耕地をまもるために農夫たちが  
築きたたてたものであつた。三成はこの地形をみて、かつての高松  
城のたたかいを思いだした、秀吉はなかなか落ちない高松城を水  
攻めにした、いま見るところでは忍城も水攻めには屈竟である。  
——よし、水攻めだ。本陣へもどつたかれはすぐに命を発し、水  
よけの堤をそのまま利用して、南から西へと半円をえがくように  
築きのばさせた。工事は夜も日もわかつたはず続けられた、人手は余

つていたし、賃銀も惜しまなかつた、それで十日たらずの日数で里余の長堤が築きあがつた。すぐに刀根を切り、荒川を切つた、ふたつの川水は濁流となつて忍の低地へおち、忍城はそのとりでの根まで洗われるに至つた。けれど仕すましたりと思うまもなかつた、それから数日のあいだ降りつづいた豪雨のために、せつかく築いた堤はたちまち欠壞し、濁流はかえつてよせての陣へ襲いかかつた。それだけではなかつた、氾濫した水はなかなかひかず、城のまわりはいちめん泥海となつたので、包圍軍は三町も五町も陣を後退させる始末となつたのである。——あれをみる、めずらしい戦があるものだ。と城兵たちは盾を叩き手をうつて笑いはや囃した。——よせてはおのれを水攻めに行っているぞ。——おまけに矢

だまがいやじやというてだんだん陣をさげてゆくわ。——あれでも関白の軍勢だ、たわけたざまをよく見てやれ。思うままに罵りのしたてる声がよせての兵たちにもよく聞えた。しかし見わたすかぎりの泥海を越えて攻めよせる法はなかった、たとえその法があったとしても、城兵のたたかいぶりを骨身にしみるほど味わったよせてには、おそらく突撃するだけの戦気はなかったに違いない。

こうして日が経っていった、糧食の尽きるのを待っても附近の民たちはぜんぶが城とつながりをもっている、石田軍の眼をぬけてはいくらでも城中へ食糧がはこびこまれる。水攻めの堤を築きたたるときにも、人足やとに備われた民たちは貫う賃銭をすぐ必要な物資に替えて城へ持ってゆくし、隙をみつけるとよせての陣

へ火をかけたなり、夜中とつぜん宿所へ斬りこんだりした。ここに忍城の不落の要素があつたのだ、八ヶ城六千余騎の兵をあつめた館林がわずか三日で開城したのに、忍がこれだけめざましく戦いつつ三十余日も守りとおしたのは、将も兵も民も、老若男女がぜんぶ心をひとつにして戦つたことによる、ことに城の内外にある民たちの協力がもつとも大きくものをいった。おんなわらべとひと口にいうけれども、これらがいちど心の底からふるい立ち、力をあわせてたたかえばこれだけのみごとな戦ができる、石田軍三万の兵力は、つまりそのちからのまえに手も足も出なかつたのだ。その点だけでも、忍城の戦は多くの合戦記のなかで特異の頁を占める価値があるであろう。……かくてついに六月は終つた。

## 六

まぶしいような七月の日光が、矢狭間やざまからさしこんでいた。

忍城本丸の矢倉に、真名女は韃負之助とただふたり対坐していた。数日まえ、小田原から良人氏長の手紙が届いたのである、氏長は連歌の友である山城守山中長俊のとりなしで、秀吉と和をむすび、その軍門にくだったのである、そして忍をも開城するようにと云いおくって来たのだ。

「城の将兵にはとがめなし、私財もそのまま退城してよく、また領民たちは戦前どおり居所財物を安堵あんどさせる」開城の条件として

は例のない寛大なものであつた、評定の結果、なお戦いぬこうという者が多かつたけれど、真名女は良人の云いつけにそむく気はなかつた、領民たちの居所財物が従前どおり安堵されるということもゆるがせにはならない、するだけのことのはした、下総守氏長の妻として、たたかうだけはたたかいぬいた、しかも合戦にやぶれて開城するのではない、良人の云うところに妻としてしたがうのだ。——開城ときめます。真名女はそうきめた、そしてすぐ城兵の武備をとかせた。

「まことにこのたびの御指揮ぶりは、老人などの思いもおよばぬ、みごとさでござりました」

鞆負之助は述懐するように云つた。

「少年どもに鉦鼓しやうこをうたせ、旗さしものをうちふらせて軍勢ありとみせ、すわ敵の寄せたりといえ、即座に三百の兵をその口へ向け、いづこを攻めてもゆるがぬ采配さいはい、あれには敵もあきれたでござりましょう」

「城がせまいおかげでした」

真名女はしづかに云った。

「そして少い兵たちの足なみがそろつていたからです。足なみがそろつたといえ、……領民たちはよくはたらいてくれました、わらわはこのうえもない教訓をうけました、農夫もあきゆうども、女も子供も、いざと心をきめればこれだけのはたらきができる。たたかいは城の備えでもなく武器でもなく、精銳の兵だけではな

い、領内のすべての者がひとつになつてたちあがる心にあるのだと」

「そしてその心をひとつにまとめたものは」

韃負之助はふところから懐紙に包んだものをとりだして云つた。

「この一本の筭でござりました」

「……………」

「家臣の女どものなかに身をしのばせて、その労苦をともにあそばしたおかた様の、ひとすじのお心がもとでござりました」

「それはもう云わぬ筈ではないか」

「申しませぬ、わたくしの口からは申しませぬ、けれど……あれ以来たれ云うとなく、あのとときの壕を筭堀とよんでおるのを御存

じでござりますか」

「こうがいぼり、それは」

真名女はかぶりをふりながら云った。

「それはあの壕を女だけの手で掘ったゆえ申すのであろう、城壕にはめずらしい、やさしい名がつけましたこと、あの者たちのこのうえもない記念になることでしょう」

そう云いながら真名女が床几から立ちあがったとき、本丸前の広場から、にわかになどよめきの声が聞えてきた。靱負之助が立っていった、すると城をたち退いてゆく民たちであろう、老若男女の夥しい人数がこの櫓を見あげ、しきりになにか叫んでいるのだった。靱負之助は戻って来て云った。

「おかた様、領民たちがいま退城するところでござります、さいごにおかた様のお姿を拝みたいようすで、あのように櫓前へ集つて騒いでおります、おぼしままで出ておやりあそばせ」

「そのような晴れがましいことはいやだけれど……」

そう云いながら、しかし思いかえして真名女は甲斐姫を呼ばせ、二人でしずかに櫓のおぼしまへと出ていった、……おそらくはこれが城主として、領民たちを見るさいごであろうと思ひながら。

# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1943（昭和18）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「笄堀《こうがいぼり》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本婦道記

## 笄堀

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 山本周五郎  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>